

シンポジウム

◆『コロナ禍における子どもの状況とこれからの生徒指導の方向性』

ファシリテーター	日本生徒指導学会関西地区研究会	会長	新井	肇
シンポジスト	近畿大学	教授	小泉	隆平
	京都市立洛友中学校	校長	間野	郁夫
	神戸市立長峰中学校	校長	古川	雅一

・シンポジウムの概要

立場の異なる3名のシンポジストが、「これからの不登校児童生徒支援の方向性と課題」について、基調講演および、別室教室支援、各校の特色ある取組による話題提供を行う。

・発表要旨

小泉 隆平「別室登校支援の現状－存在感、共感の視点から」

- ・不登校児童生徒は増加傾向にあるが、同じく増加しているであろう別室登校児童生徒数は正確にはわからない。別室登校児童生徒は、夢や希望を持っていないことも多い。今の社会(学校)は、子どもの弱点ばかりに注目して改善していこうとするが、子どものよい資質を高めていこうとしたり子どもの存在感を認めていこうとする支援が望ましい。そのためには、周りの大人たちが、子どもたちのことばにできていない(前概念的)レベルまで丁寧に注意を払い、子どもたちを理解しようとする共感的理解が重要である。別室登校児童への支援で必要なのは、小学校では教職員全体が別室登校システムを認めようとする意識の向上、適切な人材の配置、適切なアセスメントであり、中学校では別室登校の「枠組み」の明確化、校内で別室担当者を孤立させないことである。

間野 郁夫「京都市立洛友中学校の取組～不登校特例校と夜間中学校を併設する学校として～」

- ・京都市立洛友中学校は、現在、昼間部15名、夜間部18名が在籍しており、5、6校時は、昼間部・夜間部の生徒がさまざまな交流を行っている。市内には洛風中学校(特例校)もあり、洛風中学校は朝から、洛友中学校は昼からスタートするなど個別化が図られている。年間授業時数は770時間。限られた授業時数ではあるが、創作活動などの時間を多く取り入れている。5、6校時には、昼間部・夜間部合同での実技教科の授業や、交流の時間としてグループに分かれての活動、ストレッチ教室、書初めなどの活動を行っており、この交流がお互いにいい刺激となっている。世代や国籍を超えてふれあい学び合う学校としてこれからも取り組んでいく。

古川 雅一「不登校生徒・保護者への校長としての関わり方」

- ・校長として意識していることは、職員に積極的にあいさつや雑談をし、校長自身のご機嫌であることである。そうすることで、風通しのよい職場になる。また、生徒同士、職員同士が会話をするための環境整備をしたり、生徒会執行部とのラ



ンチミーティングを通して学校の問題点や課題を共有したりしている。不登校支援については、前任校では「ここいる教室」「梅っ子教室」「放課後学びの場」の3種類の別室教室を運営した。地域性を考慮し、コミュニティ・スクール委員メンバーに学習塾教室長も入ってもらった。学習塾の学生スタッフに「放課後学びの場」での学習指導を放課後毎日してもらうなど持続可能な交流を図ることができた。4月に着任した現在の学校でも、不登校の子を持つ保護者の会「峰っ子の会」を開催。今後も魅力あるあたたかい学校を目指していきたい。

・質疑応答の概要

・今の学校の課題や問題点は何か。

- ・なぜ学校に行かないのかではなく、なぜ学校に来ているのかと問い直す時代にきている。集団での学びのあり方について考える。今後、先生の役割はコーチからファシリテーターへと変わっていく。
- ・学校が安心して学べる場所になっているかが問題である。周りのあたたかいまなざし、見守りの中で、ゆっくりと自分を見つめ直すことができる場所にしたい。
- ・学校という枠組みに子どもたちを当てはめようとしてきたこと。令和は個別最適化が必要な時代だと言われている。今までの枠組みを見直し、広く包み込んでいくことが必要である。
- ・不登校児童生徒を生まないために学校ができることは何か。
- ・さまざまな魅力のある学校をつくっていくこと。
- ・不登校にはそれぞれ原因があるが、それがなければ不登校にならなかったのかというとそれは違う。もっと根本的なところに原因があり、それが何かは分からない。焦らないことと、自分を責めないことが必要である。
- ・地域から信頼される学校にすること。信用できる先生がいて、学校に行きづらい子どもが自分の話を聞いてくれる、気にしてくれると感じさせること。
- ・学習指導要領にある主体的・対話的で深い学びを洛友中学校ではどのように行っているのか。
- ・1学年5人程度で、授業や行事の中で主体的・対話的で深い学びを意識して取り組んでいるが、他の学校と違う部分はある。不登校をしている期間も理由もさまざまなので、個別に柔軟に対応している。
- ・今集団の学びの場としての学校のあり方が問われている、学びの場をたくさん用意することは必要だが、学校は今のままでいいのか。特例校は柔軟なカリキュラムの中で運営している。特例校のいいところを一般の学校でも取り入れていくことを検討していく必要がある。

・記録者雑感

なぜ学校に行かないのかではなく、なぜ学校に来ているのかと問い直すべき時代となった。改訂された生徒指導提要では「させる生徒指導」から「支える生徒指導」への転換を目指すと言われた。不登校支援においても、これまで当たり前とされてきた枠組みや価値観を見直し、子どもたちを広く、あたたかく包み込んでいくことが必要と述べられた。では、そのために学校ができることは何か。学校を子ども

たちにとって魅力ある場所にすることである。多様な価値観が受け入れられ、信用できる先生がいて、個別最適化された学びの環境がある。今後の学校のあり方、不登校支援のあり方を考える上での示唆を得ることができた。